

BUS174(ドキュメンタリー)

2005(平成17)年5月17日鑑賞(東宝東和試写室)



監督=ジョゼ・パジーリャ/犯人=サンドロ・ド・ナシメント/交渉官=パチスタ/人質=ダミアナ、ルアナ、ジュイェザ (アニメプラネット配給/2002年ブラジル映画/119分)

……これは2000年6月12日にブラジルのリオデジャネイロで現実起こったバスジャック事件のホンモノの映像を集めて映画化したもの。凶悪犯罪であることはもちろんだが、その背景としてブラジル社会に存在するストリート・チルドレンなどの貧困問題や警察の腐敗など大きな社会問題があることがよくわかる。それは決して犯人の免罪符とはならないものだが、それでも……？ 平和で豊かな国ニッポンもこれを他山の石として、凶悪犯罪の報道やその制圧のあり方について真剣に考えていかなければ……？



これは現実起こった大事件！

『BUS174』とは、ブラジルのリオデジャネイロの174路線バスでおきた現実のバスジャック事件のこと。これは2000年6月12日の夕方に現実で発生したもので、この事件はリアルタイムでTV中継され、大きな反響を呼んだとのこと。その膨大なVTR映像をもとにジョゼ・パジーリャ監督が映画化を企画し、約2時間にまとめたのがこの超異色作！

したがって登場人物はもちろん俳優ではなく、すべて現実の当事者ばかり。映像が多少悪いのは仕方がないし、映画化のためにいろいろと編集しているのも当然だが、よくもこんな映像ができたものだと感心。しかしやっぱり、ちょっと生々しすぎる面も……？



伏線としてのカンデラリア教会虐殺事件

このバスジャック事件がおこる伏線として、1993年7月リオ市内で起きたのが、

カンデラリア教会虐殺事件。これは、深夜に教会前の広場で寄り添って寝ていた路上生活の子供たちに2台の車が近付き、車から降り立った男たちが次々と、子供たちを射殺したという事件。ブラジルには「死の部隊」と呼ばれる、ストリート・チルドレンを快く思わない店主や地域の実力者たちによって雇われたグループが日常的に存在し、彼らはストリート・チルドレン狩りを至るところでやっているとのこと。しかもそのことが社会的に悪とされず、賛否両論があるということだ。

カンデラリア教会虐殺事件は、マスコミが大々的に取り上げたこともあって日常茶飯事的に発生するストリート・チルドレン迫害事件として注目を集めたものだが、バスジャックの犯人サンドロ・ド・ナシメントはこのカンデラリア教会虐殺事件を目撃していた。そのうえ彼は幼少時、自分の母親が刺し殺される場面を目撃するという体験も……。もちろん、そのことがこのバスジャック事件の免罪符となるわけではないが……？

人質が語る意外な物語

犯人のサンドロは若い女性を楯とし、彼女に拳銃を突きつけながらバスの外に向かっては「ライフルを渡せ！」などと要求。「今、バスの運転手を呼んでいる」「落ち着いて話せ」などと説得を試みるバチスタ交渉官だが、どうも話はうまく進展しない……。しかし意外にも会話は2つの方面でなされており、バスの中での犯人サンドロと人質の少女との会話(?)は比較的順調だったらしい。これは、人質として命の恐怖にさらされていた若い女性がインタビューで答えているのだからまちがいない。すなわち、サンドロはピストルの引き金に手をかけていたものの、実際にそれを引く気はなく、あくまで外部に対する脅しとして演技していた(?)というわけだ。そしてこのサンドロの気持を理解した(?)人質の女性は、そのサンドロの要求に応えるべく大声でわめいたり、とり乱した表情をしていたとのこと……。これは何とも意外な物語……。？

その他のインタビューにも驚き！

これはドキュメント映画だが、ダラダラと映像をつないだだけのものではなく、

あくまでジョゼ・パジーリヤ監督の意図・狙いに沿ってつくられた創作映画。したがってそこでは、インタビューで誰に何を語らせるのか大きなポイントとなる。インタビューに登場するのはまず前述の人質の少女だが、その他にもサンドロの身内の者や警察関係者等であり、彼や彼女らの率直で生々しい分析がこの映画を生き生きしたものとさせる原動力となっている。その詳細は映画を観てのお楽しみ……。

じっと聞いているのはかなりしんどいけれども、やはり真実を見つめていくためには、それくらいの我慢をしなければ……。

ブラジル社会のお勉強 その1 ストリート・チルドレンとは？

ブラジルの人口は約1億7千万人で面積は日本の22.6倍とのことだが、豊かで平和な国ニッポンとは大きく様相が異なる。それを取りあげていけばきりがなが、この映画を鑑賞する上での必要な知識について、パンフレットをもとに少しお勉強しておこう。

その第1はストリート・チルドレンの存在。その理由は明快で、そのすべての根源は貧困。そこにはもちろん親が死亡したり、逮捕されたことによって孤児となった子供もいれば、家庭内暴力から逃れるために家を飛び出した子供もいる。そしてこれは貧しい社会では必然的に発生する現象。ちなみに日本でも、中世の戦乱がうち続いていた時代、京の河原にはゴロゴロと河原モノがいた……？ そしてストリート・チルドレンの生きザマも万国共通。

つまり、いかに人を出し抜いて生きていくかの競争となるわけで、盗みやかっぱらいは当たり前、場合によれば殺人も……。そしてそこに必ず存在するのが麻薬・覚醒剤などの薬物。

こんな異常な社会現象が蔓延したら、そりゃ簡単に改革できるはずがないのは当然……。

ブラジル社会のお勉強 その2 ブラジルの警察は？

最近は大阪市の職員厚遇問題が大きく報道され、「公務員」の倫理が問われている。また日本の警察においても「不祥事」が続出している。しかしそれでも、

まだ日本の官僚（公務員）や警察組織は「健全」……？ もっともそれは、ワイロやアルバイトが当たり前のブラジルの警察と比べればの話だが……。ブラジルには、①軍警察、②連邦警察、③文民警察の3つの警察があるとのことだが、文民警察のレベルになれば、ワイロやアルバイトは当たり前……。彼らは拳銃を持っているだけに、こういう連中が登場して好きに動けばヤバイに決まっているのだが……。それにしても心配は、最近中国でも共産党幹部や公安（警察）幹部のワイロ事件がさかんに登場し摘発されていること。さてこれらと対比して日本の行く末は……？

ブラジル社会のお勉強 その3 ブラジルの刑務所は？

ひと昔前の日本は世界で最も治安の良い国といわれ、犯罪検挙率も高かったが、最近では日本でもそれが低下してきた。他方、凶悪犯罪を含む犯罪の数は増加し、拘置所や刑務所は満パイ状態。昔、刑務所は嫌悪施設とされ、どの地方自治体もその建設に反対していたが、財政難が続く中、今では刑務所建設の誘致合戦も……。これは喜ぶべき現象か、それとも悲しむべき現象か……？

それはともかく、犯罪大国ブラジルでは刑務所施設の待遇はべらぼうに悪いらしい。

多少ボヤかしてはいるものの、この映画で紹介される生々しい映像では、なんと8人用の部屋に30人が収容され、重なって寝なければならないような状態も……。もちろん「俺は無罪だ！」と叫んでいた人もいたから、ろくな裁判もなされていないケースもたくさんあるのでは……？

今の日本は理想的な共産主義国家……？ その1 中国との対比

こんなブラジルの状況をこの映画で観たのを契機に、私がいつも考えている、「今の豊かで平和な国・ニッポンは最も理想的な共産主義国家ではないか」という持論をひとくさり……。

中国（中華人民共和国）は中国共産党が一党支配している国。ところが、改革・開放政策を採用した中国は、資本主義・市場経済を取り入れて急速に発展した。かつては労働者（プロレタリアート）の敵とされた資本家（ブルジョアジ

一) を共産党内に取り込む必要性が生まれ、近時は企業経営者も入党できることに……。そして、それまでの「人治主義」から「法治主義」へ切り替えるべく、さまざまな施策を展開している。

しかし、貧富の差、沿岸部と内陸部との発展の格差、共産党や官僚のワイロや権限濫用等の矛盾は次第に大きくなっており、そのコントロールに四苦八苦しているのが実情。今年4月に突然大問題となった「反日デモ」への対応をみても、その苦勞ぶりは明らかだ。

今の日本は理想的な共産主義国家……？ その2 日本の自由と平和は？

他方、日本は？ 日本は、言うまでもなく自由で民主主義の国家。表現の自由、政党結社の自由その他、幅広い自由が認められた国。そして日米安保条約を基軸とした安全保障体制によって平和に恵まれたうえ、高度経済成長政策によって豊かさも手にすることができた。明治維新後の日本の急速な近代化と1945年の敗戦後の日本の急激な復興は、世界的にも珍しいケースだ。そして戦後60年の今、日本はそんな「自由」と「民主主義」を謳歌しているが、国債（借金）を中心とした巨大な財政赤字や少子高齢化をはじめとする、これまで先送りをしてきたさまざまな矛盾も大噴出中……。

今の日本は理想的な共産主義国家……？ その3 お金と自由は？

しかしやっぱり、今の日本の自由と民主主義は、いつまでもつかは別として、世界最高水準！

たとえばお金の問題を考えても、日本は多分世界一「中庸の国」で、アメリカや中国のような極端な大金持ちなどは存在しない。存在しても税金でとられるため、3代も経てば並の金持ちになってしまう。逆に、ホントに食べるものがないために飢えて死ぬ人などどこにもいない……？

生活保護の制度が完備し、弱者に対する温かい思いやりは多分世界一……？

また自由の面でも、ホントに何をやってもオーケーで、罪を犯してもアメリカや中国のように死刑になったり、何十年も刑務所に入れられることもなく、楽々と(?) シャバに戻ることができる。

理想的な共産主義社会とは、「人々が欲するままに生きることができる社会」のこと。レッキとした人種差別があるアメリカや貧富の差の極端な中国、そして貧困にあえぐ中ストリート・チルドレンが大量に生まれている国・ブラジルなどと対比すれば、戦後60年の今のニッポンは、理想的な共産主義社会の国……？

マスコミ報道と特殊部隊のあり方を考える！

去る4月25日に発生した兵庫県尼崎市でのJR宝塚線（福知山線）の列車脱線・転覆事故をはじめとする社会的大事件の報道や各種の凶悪犯罪の報道をみると、そこにはさまざまな問題があることがよくわかる。

しかし、この『BUS174』の報道やそれを映画化したスクリーンを観ていると、よくもここまで生映像が撮れるものだと感心するとともに、こりゃおかしいのでは、と思ってしまう。

またマスコミ報道のみならず、犯人を鎮圧すべき特殊部隊の動きにも大きな問題がある。つまり、私が映像を観ているだけでも、いろいろなタイミングで犯人射殺のチャンスはいくらでもあるように思えるが、バスの外からはいろいろな人が勝手に(?)話しかけているだけで、交渉人を中心とした統一的な交渉などまるでなされていない。

そして最後の「ハイライト」となる射殺シーン。その内容はここでは書かないが、ここでみるブラジルの特殊部隊のレベルの低さはびっくり。これではあまりにも……？

凶悪犯罪の続出が心配されるニッポンでも、ブラジルのこの事件を他人ゴトと考えず、プロの人質交渉人の育成（『交渉人 真下正義』でホントに大丈夫？）やプロの特殊部隊の養成が本気で必要なのでは……？

2005(平成17)年5月18日記